

令和7年度

競技かるた部

＜日本一への挑戦・王者としての矜持＞

全国高等学校かるた選手権大会
団体ベスト4の実績

1 競技かるた部のモットー

- ・部員意思の尊重
- ・学年の枠を越えた切磋琢磨
- ・心身両面の成長

2 特徴

- ・全国レベルの実績
- ・文武両道の達成
- ・多彩な人材の受け入れ
- ・恵まれた練習環境

3 一年間の活動

- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 宮城県予選・個人戦 (5月中旬)
- ・全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会 宮城県予選・団体戦 (5月下旬)
- ・東北・北海道小倉百人一首かるた大会 (7月初旬) *総文祭代表メンバー
- ・全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会 団体戦・個人戦 (7月下旬)
- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 (8月上旬)
- ・宮城県小倉百人一首かるた競技大会 (10月下旬)
- ・東北・北海道高等学校小倉百人一首かるた新人大会 (12月中旬)

4 練習活動日

- ・月・火・木・土曜日
- ・月・火・木曜日：16：00～18：45
- ・土曜日：9：00～12：30

5 活動場所

秋桜館2F 和室

6 活動内容

読み上げ音声機「ありあけ」を使っているの部員同士の対戦と対戦後の反省会を基本としています。また、コーチ（徳永理枝 七段）に週1で指導いただいています。

7 部員在籍

1年 19名 2年 11名 3年 9名

8 これまでの戦績（全国大会・東北大会）

平成30年度（2018）

- ・全国高等学校かるた選手権大会 団体初出場（滋賀県大津市）
- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 出場（長野県長野市）

令和元年度（2019）

- ・同好会から部に昇格
- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 出場（佐賀県佐賀市）

令和2年度（2020）

- ・新型コロナウイルスによる各種大会中止

令和3年度（2021）

- ・全国高等学校かるた選手権大会 団体ベスト4（滋賀県大津市）
- ・*県勢 20数年ぶり
- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 出場（和歌山県和歌山市）

令和4年度（2022）

- ・全国高等学校かるた選手権大会 団体出場（滋賀県大津市）
- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 出場（東京都）ベスト8
- ・東北・北海道高等学校小倉百人一首かるた新人大会 優勝（秋田県秋田市）
- ・全国高校生かるたグランプリ大会 出場（東京都）

令和5年度（2023）

- ・全国高等学校かるた選手権大会 団体出場（滋賀県大津市）
- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 出場（鹿児島県鹿児島市）ベスト8
- ・東北・北海道高等学校小倉百人一首かるた新人大会 優勝（北海道札幌市）
- ・全国高校生かるたグランプリ大会 出場（東京都文京区）

令和6年度（2024）

- ・全国高等学校かるた選手権大会 団体出場（滋賀県大津市）
- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 出場（岐阜県山県市）

令和7年度（2025）

- ・全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門 出場（香川県高松市）

2025年 10月 東北北海道大会宮城県予選



2025年 7月 香川総文祭







2024年12月 東北北海道新人大会



2024年8月 岐阜総文祭





2024年7月 全国選手権大会







2023 全国高等学校小倉百人一首かるた選手権にて（滋賀県大津市近江神宮）



全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門（鹿児島総文祭）



東北・北海道高等学校小倉百人一首かるた新人大会（札幌市）



宮城県高等学校文化連盟表彰式



全国高校生グランプリ大会（東京）



小倉百人一首

秋の田の かりほの庵の 苦とあらみ わが衣手は 露にぬれつつ
 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣干すてふ 天の香具山
 あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む
 田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ
 奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞く時ぞ 秋は悲しき
 鵲の 渡せる橋に 置く霜の 白きを見れば 夜ぞ更けにける
 天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも
 わが庵は 都の辰巳 しかぞ住む 世をうぢ山と 人はいふなり
 花の色は 移りにけりな いたづらに わが身世にふる なかめせしまに
 これやこの 行くも帰るも別れては 知るも知らぬも 逢坂の関
 わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ 海人の釣船
 天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ 乙女の姿 しばしとどめむ
 筑波嶺の 峰より落つる 男女川 恋ぞ積もりて 淵となりぬる
 陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れそめにし われならなくに
 君がため 春の野に出でて 若菜摘む わが衣手に 雪は降りつつ
 立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば 今帰り来む
 らはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは
 住の江の 岸に寄る波 よるさへや 夢の通ひ路 人目よくらむ
 難波潟 短き蘆の ふしの間も 逢はでこの世を 過ぐしてよとや
 わびぬれば 今はたおなじ 難波なる みをつくしても 逢はむとぞ思ふ
 今来むと 言ひしばかりに 長月の 有明の月を 待ち出でつるかな
 吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を 嵐といふらむ
 月見れば らぢにものこそ 悲しけれ わが身一つの 秋にはあらねど
 このたびは ぬさも取りあへず 手向山 紅葉の錦 神のまにまに
 名にし負はば 逢坂山の さねかづら 人に知られで 来るよしもがな
 小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば 今ひとたびの みゆき待たなむ
 みかの原 わきて流るる 泉川 いつ見きとてか 恋しかるらむ
 山里は 冬ぞ寂しさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば
 心あてに 折らばや折らむ 初霜の 置きまどはせる 白菊の花
 有明の つれなく見えし 別れより 暁ばかり 憂きものはなし
 朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪
 山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ 紅葉なりけり
 ひさかたの 光のどけき 春の日に 静心なく 花の散るらむ
 誰をかも 知る人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに
 人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香に匂ひける
 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ
 白露に 風の吹きしく 秋の野は づらぬきとめぬ 玉ぞ散りける
 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもあるかな
 浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど あまりてなどか 人の恋しき
 しのぶれど 色に出でにけり わが恋は ものや思ふと 人の問ふまで
 恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひそめしか
 契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波越さじとは
 逢ひ見ての のちの心に くらぶれば 昔はものを 思はざりけり
 逢ふことの 絶えてしなくは なかなかに 人をも身をも 恨みぞらまし
 あはれとも いふべき人は 思ほえて 身のいたづらに なりぬべきかな
 由良の門を 渡る舟人 かぢを絶え ゆくへも知らぬ 恋のみちかな
 八重むぐら しげれる宿の さびしきに 人こそ見えね 秋は来にけり
 風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ くだけてものを 思ふころかな
 御垣守 衛士のたく火の 夜は燃え 昼は消えつつ ものをこそ思へ
 君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな
 かくとだに えやは伊吹の さしも草 さしも知らじな 燃ゆる思ひを
 明けぬれば 暮るるものとは 知りながら なほうらめしき 朝ぼらけかな
 嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は いかにか久しき ものとかは知る

忘れじの ゆく末までは かたければ 今日を限りの 命ともがな
 滝の音は 絶えて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ
 あらざらむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたびの 逢ふこともがな
 めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲がくれにし 夜半の月かな
 有馬山 猪名の笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする
 やすらはで 寝なましものを さ夜更けて 傾くまでの 月を見しかな
 大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立
 いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな
 夜をこめて 鳥の空音は 謀るとも よに逢坂の 関はゆるさじ
 今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを 人づてならで いふよしもがな
 朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらはれわたる 瀬々の綱代木
 恨みわび ほさぬ袖だに あるものを 恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ
 もろともに あはれと思へ 山桜 花よりほかに 知る人もなし
 春の夜の 夢ばかりなる 手枕に かひなく立たむ 名こそをしけれ
 心にも あらで憂き夜に 長らへば 恋しかるべき 夜半の月かな
 嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり
 寂しさに 宿を立ち出でて ながむれば いづこも同じ 秋の夕暮れ
 夕されば 門田の稲葉 訪れて 蘆のまろ屋に 秋風ぞ吹く
 音に聞く 高師の浜の あだ波は かけじや袖の ぬれもこそすれ
 高砂の 尾の上の桜 咲きにけり 外山の霞 立たずもあらなむ
 憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ 激しかれとは 祈らぬものを
 契りおきし させもが露を 命にて あはれ今年の 秋もいぬめり
 わたの原 漕ぎ出でて見れば ひさかたの 雲居にまがふ 沖つ白波
 瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の われても末に 逢はむとぞ思ふ
 淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に 幾夜寝覚めぬ 須磨の関守
 秋風に たなびく雲の 絶え間より 漏れ出づる月の 影のさやけさ
 長からむ 心も知らず 黒髪の 乱れて今朝は 物をこそ思へ
 ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただ有明の 月ぞ残れる
 思ひわび さても命は あるものを 憂きに堪へぬは 涙なりけり
 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる
 長らへば またこのごろや しのばれむ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき
 夜もすから 物思ふころは 明けやらで 関のひまさへ つれなかりけり
 嘆けとて 月やは物を 思はする かこら顔なる わが涙かな
 村雨の 露もまだ干ぬ 真木の葉に 霧立ちのぼる 秋の夕暮れ
 難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ 身を尽くしてや 恋ひわたるべき
 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする
 見せばやな 雄島の海人の 袖だにも 濡れにぞ濡れし 色は変はらず
 きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしちに 衣かたしき ひとりかも寝む
 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね かわく間もなし
 世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ 海人の小舟の 綱手かなしも
 み吉野の 山の秋風 さよ更けて ふるさと寒く 衣打つなり
 おほけなく 憂き世の民に おほふかな わが立つ袖に 墨染の袖
 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで ふりゆくものは わが身なりけり
 来ぬ人を 松帆の浦の 夕なぎに 焼くや藻塩の 身もこがれつつ
 風そよぐ 檣の小川の 夕暮は 御襦ぞ夏の しるしなりける
 人も惜し 人も恨めし あざきなく 世を思ふゆゑに 物思ふ身は
 古き軒端の しのぶにも なほ余りある 昔なりけり